

# 月影



第67号

令和二年九月一日発行  
浄土宗西山禅林寺派  
常林院

初めも善く

中も善く

終わりも善かれ

釈迦



善く死ぬことは

善く生きること

善く生きるとは

たった今を

大切にすること

感謝の心を持ち

懺悔さんげの心を忘れず

自分のことより

他人のことを想うこと

# 開宗八五〇年 法然上人の生涯

【四】

## 修行の日々



### 黒谷青龍寺へ

十八歳になった法然上人は、皇円こうえんのもとを離れ、比叡山西塔の黒谷青龍寺くろたにせいりゅうじへ向かいました。

黒谷は当時、比叡山において特に厳しく「論湿寒貧ろんしつかんひん」（熱心に仏法を論じ、夏の湿気と冬の寒さに耐え、清貧に甘んじること）と言われた地域で、自分の利益を求めず、真剣に仏道を追求する修行僧たちが集まっていた。



青龍寺

### 叡空に弟子入り

ここ黒谷で法然上人は、慈眼房叡空じげんぼうえいくうに弟子入りします。叡空は皇族や貴族からも尊敬される学識豊かな人物でした。

法然上人の名「法然房源空ほうねんぼうげんくう」は、この叡空から授けられたとされています。

叡空のもとで、わき目もふらず修学に励んだ法然

(法然上人二十五霊場hpより)

上人は、一切経（経典などの解説書を集成したもの）を五度も読破しました。

学んでいく中で疑問が出てくると、その疑問を師である叡空にぶつけ、時には、問答の末に師弟が意見を曲げず、論争になることも少なくなかったそうです。あまりに激しい論争の末に、腹を立てた叡空が法然上人を木枕で打ちつけたこともあったそうです。

## 往生要集



### 極楽と地獄

表的な典籍とされる書物「往生要集おうじょうようしゅう」を著わしたのもこの頃です。

その内容は、地獄や極楽の姿を詳細に描写し、人々に極楽浄土への往生をすすめる、その実践方法として「念仏」を説くというものでした。

すべての人を対象にした「念仏」を説いたその教えに、法然上人は大きな感銘を受けました。

とはいえ、往生要集に説かれている念仏は、「南無阿弥陀仏」と称える称名念仏よりも、心を静めて極楽を観察する「観念かんねんの念仏」に重きをおいたものでした。(つづく)

平安時代の天台宗の僧、恵心僧都えしんそうずが浄土信仰の代

# 彩寺記

## 盆施餓鬼法要

八月十六日。お盆の最後の行事である施餓鬼法要を勤めました。

今年は、コロナウィルス感染予防の為、例年とは違う形で勤めさせていただきました。



施餓鬼棚



テープで印

そして施餓鬼旗をお取りいただき、そのまま退堂していただくようにしました。

僧侶は住職（私）と組寺四ヶ寺。マスクを着用して読経し、水塔婆は住職がまとめて回向させていただきました。

例年とは違う形で、大きな戸惑いと寂しさを感じましたが、多くの檀信徒様にお参りいただき、皆様のご理解とご協力のおかげで滞りなく勤めるこ



とができました。有り難うございました。

来年、コロナウィルスの感染状況がどうなっているのか分かりませんが、その時の感染状況に応じて、法要の形を柔軟に変えていくことで、少しでも丁寧な法要とご先祖供養ができるように努めていきたいと思えます。



マスク着用で読経

例年は、檀信徒の皆様の本堂内にお座りいただき、一軒ずつ読経し、お焼香をしていただきました。しかし、今年は本堂内に椅子は置かず、檀信徒様には本堂前に待機していただき、法要開始後、本堂正面から入堂して消毒、廊下から一定距離を保ちながら、順次、施餓鬼棚の前でお焼香をしていただきました。

# 仏教歳時記



南無秋の彼岸の入り日 赤々と

宮部寸七翁

秋分の日を中日として前後三日間、合わせて七日間を秋彼岸といえます。単に彼岸といえば春彼岸のことをさします。

煩惱多いこの世を此岸、悟りの境地を彼岸といえます。お彼岸の期間は、此岸から彼岸へ渡るために、心の修養をする期間です。

そして、ご先祖供養の為、お墓参りや彼岸会の法要に参詣して供養します。



## 雑記抄

く 出口の光く

信州の善光寺に「戒壇巡り」があります▼「戒壇巡り」とは、本堂内の階段を降り、階下にある回廊を巡るのです。回廊の途中、ちょうどご本尊の真下にあたる所に「極楽の錠前」と呼ばれる錠が懸かっています。その錠に触れることで、ご本尊と仏縁が結ばれ極楽に往生できるといわれます▼ただし、この回廊が真っ暗闇で何も見えません。一歩踏み出すのも勇気がいる暗闇です。参拝者は壁に触れながら、恐る恐る進んでいきます。時間がとても長く感じられ、もう出られないのではと錯覚する

くらい不安に襲われます。無事に極楽の錠に触れ、そして、出口の光を目にした時、大きな安心感と光のありがたさを感じます▼進むべき方向が分からない。今どこを歩いているのか分からない。出口はあるのだろうか。そんな状況におかれたとき、人は強い不安を感じます。▼今、コロナウィルスで世界中に大きな不安が広がっています。いつ終息するのか。感染したらどうしよう。考え出すと不安は大きくなるばかりですが、今は耐え忍び、出口の光が見えることを待ち望むしかありません。必ず、始まりがあれば終わりがあります。